

第 3 章 関連調査報告

1 岩戸山・南観音山・北観音山

木下 龍一

(京町家再生研究会)

はじめに

平成29年(2017)、祇園祭鷹山調査のため、現存する曳山3基、岩戸山、南観音山、北観音山の山建て時の調査を実施した。祭り準備の本番前6月3日には、3基の山建てを実地に指揮されている大工方、作事方の棟梁にお会いして、各山の構造上の特徴や、組立て時の心掛け等についてヒアリングを行った。

7月11日、12日には、前祭の山建て時に岩戸山、19日、20日の後祭の山建て時に北観音山、南観音山、そして24日、25日の解体時の南観音山において、部材実測及び写真、VTR撮影等の調査を実施した。調査のポイントは、山家臺^{やまやたい}の屋根、小屋組、化粧柱等の上部構造と、舞台下の櫓、石持、車等の下部構造を連結する仕組みの解明である。製作年代の古い順序に基づき、岩戸山ー南観音山ー北観音山の順に、それぞれの山の特徴を報告し、比較考察を加えて、考証としたいと考える。なお本稿では、本格的屋根のついた曳山構造体を、町内史料の表現に従って「山家臺」と称する。また、本文中、記載無き寸法の単位はmmとし、tは厚さ、wは幅、lは長さ、hは高さを表す。

1 岩戸山

初日の作業では、櫓を組み舞台床組みをして、腰貫に渡した真木受をのせ、舞台後方に位置する2本のユスリ^{はしら}柱を櫓の桁行方向中貫にのせた受木にホゾ差しし、櫓柱に縄絡みをする。櫓足元に古い車軸を取り付け、大デコを天秤にして櫓を南に寝かせる。横から真木を差し込み舞台床組に板で固めた上で、真木に真松を削ぎ継ぎし、金輪で止め、割り竹で包み、縄巻き固定して、全体を元に建て起こす。

翌12日朝、舞台の上の欄干上に仮設足場を架けて、塗四本柱と残りのユスリ柱2本を、桁方向に中貫から持ち出し、横受け梁に乗せた足固めにホゾ差しする(図1)。塗四本柱の欄干下から4尺余りの部分には、内側にL型の檜板をあて、妻方向に足元を横繋ぎして固める。また、最終的に塗四本柱の舞台下部分を補強するために、妻面には筋違を付け、桁方向には斜材2本を加えて左右前後の揺れ止めをする(図2)。

屋根の特徴としては、桁2本、虹梁2本、梁4本、棟木と母屋^{もや}それぞれ2本の構成ではあるが、棟木は真木を挟んで南北に通し、桁に架けた梁4本と虹梁2本、母屋桁をそれぞれ2本で屋根を架け、ハネ木8本を仕込んで化粧軒を支持する(図3)。

棟木2本を平行させて真木を挟む構法は、南観音山や北観音山と違い、屋根と真松の揺れを完全に別々に扱っている。真松の全長は約7mである。屋根と下部を連結する柱は真木を除い

て8本であるが、特徴のあるユスリ柱4本は、化粧天井の廻縁（梁）の境界をホゾ差しして、屋根荷重を分担して受け、特に桜材でできた梁が軒桁を横差しして、コミ栓止めしてある所から、水平方向の揺れを制御する役割を荷っている（図4）。従ってユスリ柱は、構造上の山家臺の動的荷重を支える機能を果たすと共に、象徴的に天の岩戸の山洞^{ほら}を表わす通時的意味を温存したものである。



図1

岩戸山

四本柱とユスリ柱を差し降ろす



図2

岩戸山

四本柱足固めに斜材を入れ、縄絡みを行う

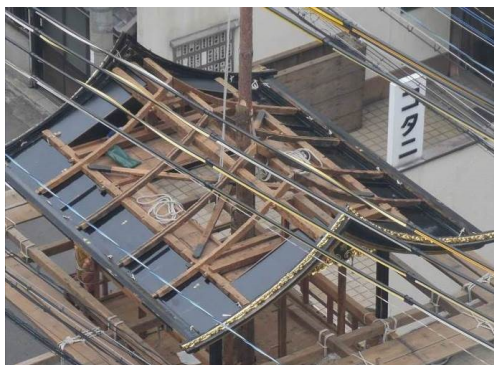


図3

岩戸山

2本の棟木と屋根架構



図4

岩戸山

軒桁を横から差し、コミ栓止めをする梁

2 南観音山

7月19日は、後祭の山建てが新町通の六角町の北観音山と百足屋町の南観音山で行われる。それぞれの町内で、朝6時に作事方、大工方の職方と町の役員が集合し、いずれも町の観音様に拝礼した上で蔵出し作業が始まる。南観音山でも、岩戸山と同様に部材の仮設資材と胴組の部材が道路上の各所に整然と並べられ、櫓の組み立てが始められた。この山家臺の特徴は、櫓の次に舞台を組んだ後、その上に四本柱と2本の観音柱を立てていることである。その組み方は岩戸山同様、仮設足場の上で、桁、梁、虹梁を下組みし、8人掛かりで一気に柱の上に載せ、屋根を組みあげることである。真木と共に舞台の中央内よりに立つ2本の観音柱が天井幕の上の梁を突き、舞台下では櫓の腰貫に真木受と並行して掛けられた2本の受木をホゾ差ししている。この形の構法では、上下の動きを、屋根を支える小屋梁に直接伝えるため、梁は両側の桁と強く結合されていなければならない。従って、梁は桁の側面中央を長ホゾで水平に貫き、鼻栓で固く緊結されているわけである。この山の屋根は、岩戸山と違って棟木を前後1本ずつ梁上^{つか}の束で立ち上げ、同時に2本の母屋を前後の破風まで通している。さらに棟木下から、母屋下を通して8本のハネ木を桁に載せ、軒庇を支える形は、岩戸山と同様の手法がとられている(図5)。

舞台下の四本柱の下部は、副え柱を介してまず、妻方向への足固めに差し降ろされ、さらに桁方向の足固めに相欠きダボ止めで支持されている(図7)(図8)。

この形式の副え柱構法は現在の放下鉾、函谷鉾や月鉾にも見受けられ、大屋根の揺れをできるだけ柔らかく間接的に櫓に伝達する方法として、広く汎用されているようである。

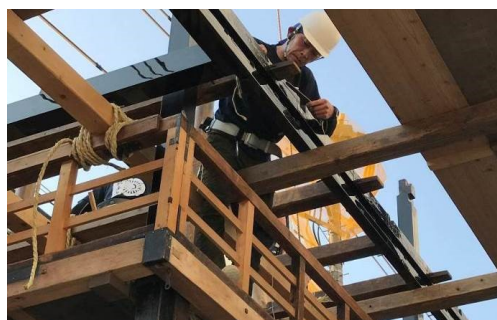


図5
南観音山 桁に梁を差す



図6
南観音山 観音柱と梁



図 7

南観音山

副え柱を介して妻方向の足固めに差し
降ろされる四本柱



図 8

南観音山

四本柱は妻方向の足固めに差し降ろされ、
桁方向の足固めで支持される

3 北観音山

この山家臺を支える化粧柱は、96^{かく}角塗四本柱のみで、補助柱はない。但し、檜の真木上部160 径（下部 180 径八角形）は、棟木下で厚さ 3 cm の檜板でタガ巻きされた突出部を持ち、桜材の板木で間隔 1.5 cm の隙間を開け、間接支持される様になっているのがこの山の特徴である。

屋根架構が、桁 2 本、虹梁 2 本、梁 4 本、棟木前後大小 1 本ずつ、母屋 2 本、母屋束 8 本、棟束 4 本（+太平束 2 本）、ハネ木 6 本等で構成されているのは、南観音山とおおよそ同様であるが、桁にかかる梁の仕口が差し口ではなくアゴ掛けになり、鋼製ピンで固定する所が相違している（図 9）。従って架構方法は、岩戸山、南観音山と違って四本柱に桁を差し、梁を渡し束の上に母屋棟木を載せて架構する。

一方、舞台下の四本柱の足固めに至る 4 尺余りの部分が、箱柱の形状になっており、上部の柱がその箱にささっている。舞台^{かまち} 框の四隅に羽子板と呼ばれる桜の厚板で固定されている。箱 130 角（中空部 100 角）×1120ℓ（延長部+305、長ホゾ+180）は、無垢の檜材を加工して作られ、底（10 cm 厚）と仕口部分は檜材の真物である。内側より 2 枚の檜板（18t×130w×1425ℓ）を 3 カ所金輪で止め、下方を足固めにホゾ差しし、延長部の足元を 90 度に方向を換えて、横繋ぎ材で連結する仕掛けになっている。檜の中貫から妻行と桁行 2 方向へ井桁状に持ち出した、横^{おうかざい}架材に足固めを載せ、四隅サヤ状の箱柱で間接的に四本柱を受けた上で、妻方向に横繋ぎされる（図 10）。

檜組の貫の形状比率と持ち出し梁足固め材の材寸と、かみ合わせの微妙な寸法体系が統一的に計算され、墨打ちされた形式が見事な様式美を創出している。機能的には車輪の急激な上下運動を全体の架構でやわらかく制御した変異を、柱を通して屋根に伝える仕組みになっている。何度かの試行錯誤を経て到達した形式であり、文政 11 年（1828）の^{ちよんな} 鉦 始めから 5 年の歳月をかけ完成した形である。

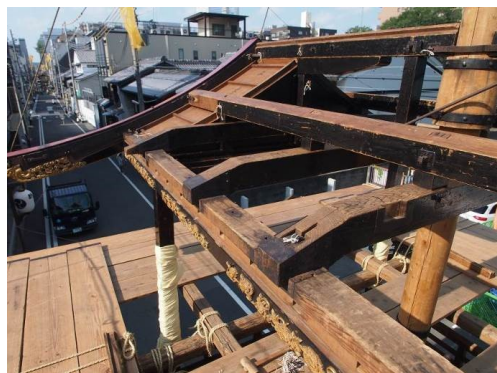


図9
北観音山 桁にアゴ掛梁



図10
北観音山 舞台下架構

4 考察

ここまで曳山3基山建ての特徴と構造仕組みを比較検討してきた。以下は3つの視点に絞って考察を加えまとめに代えたい。第1の視点は屋根の構造、第2は屋根を支える柱について、第3は屋根と檼等下部構造との連結システムに視点をおいて3者を比較し、それぞれの相違と特徴を明らかにする。

第1の視点の屋根構造については、南観音山と北観音山の棟木の配列は相似であり、岩戸山が古風な2本の棟木が真木をはさんで破風から破風まで並行して通っている。小屋組みの架構においては、桁と梁の接合方法が、岩戸山と南観音山が桁の内側面を梁が横差しし、鼻栓止めになっているのに対して、北観音山は、梁が桁にアゴ掛けになっている。この違いは、山建て時の作業の難易度に表れている。つまり、前者では、梁と桁を足場上で地組し、8人掛かりで同時に多数の柱のホゾ先に載せる必要がある。後者は、柱に桁を載せ、その上に梁を架構する順当な作法で、より易しい建て方ができる。一方、ハネ木の仕様は、岩戸山、南観音山では、合掌形の桜材のハネ木を、軒桁をテコに軒庇の茅負を跳ね上げる仕掛けであるが、北観音山では、梁に平行した小さなハネ木で、軒庇を梁側面に金物で止めつけている。合理的で進化した近代的手法である。

第2の視点の柱本数については、真柱を除いて岩戸山8本、南観音山6本、北観音山4本である。各山の四本柱（補助柱）の寸法は、太い順に、南観音山105角×2970ℓ（観音柱100径×4300ℓ 2本）、岩戸山99角×3230ℓ（ユスリ柱100径×3480ℓ 4本）、北観音山96角×3080ℓである。柱の材積は北観音山が最も小さく本数も少ない。

第3の視点は、屋根を支える柱と下部胴組との連結システムの比較である。岩戸山、北観音山の柱は、舞台下檼の中貫レベルまで降ろされ、直接あるいは間接的に、足固めにホゾ差し固定されている。北観音山では、妻方向の持出し受木に支持されて、足固めにささる箱柱（この中に四本柱が挿入されている）の足元が、桁方向の持出し受木に載せた横繋ぎ材で栓打ち連結されている。一方、岩戸山の足固めは、中貫上妻方向だけの足固めに載せてあり、前者より横揺れの自由度が高いと思われる。従って、四本柱の前後左右の揺れを止めるために、檼外側に斜材と筋違を用いた補強を後補で加えている。南観音山においては、観音柱と呼ばれる補助柱は2本であるが、小屋梁から檼の下段腰貫上の受木まで届く4.3mの長柱を用いている。真木が屋根棟木上より腰貫の受木までさし降ろされ、山家臺の重心を下げる働きを荷うのと相乗して、運行の安定に貢献するものである。前述した四本柱の足元が、金輪で止めた副え柱を介して、妻方向の足固めを通して、檼中貫に荷重を伝えるシステムと併用したユニークな仕組みである。恐らく、観音の聖域を象徴する観音柱を保存するための工夫が、複合的に創出したシステムであると推測できよう。

他方、この南観音山の四本柱からの重力を副え柱で、檼中貫に伝えるシステムが、数基の鉾にも見受けられる事を指摘したが、祇園祭の中では、曳山の鉾化が見られる事と、翻って鉾の山化という現象も有り得る事である。退転直前の鷹山の姿については、その様な都市祭礼の磁場における相互の影響や競合という現象も、視野に入れるべき文化的要件の一つではないだろうかと考えている。



図 11

北観音山

四本柱が大屋根を支える北観音山全景

参考文献

若原史明『祇園会山鉾大鑑』八坂神社 1982年

参考 曳山と鉾の基礎情報

福持 昌之

(京都市文化財保護課)

曳山3基の構造を考察する上で、サイズおよび重量の情報は欠かせない。また、曳山の構造は鉾と対比してされていることから、曳き車形式の鉾と曳山11基について表で示す。

なお、「幅」「高さ」「長さ」「最小回転半径」については、毎年の山鉾巡行にあたり、祇園祭山鉾連合会が京都市建設局道路明示課に提出している「特殊車両通行許可申請書」に記載の数値であり、いわば公称値である。例えば、曳山の「高さ」は、真松の高さが年ごとに変わってしまうことや、車輪が年々すり減っていくなど、数値変動の要因があるため、この公称値は参考値であると留意されたい。また、「長さ」は曳綱を含めていないため変動はなく、基本的に石持の長さに相当する。しかし、山鉾によっては車輪が石持の前後にはみ出る場合もあり、その場合はやはり、車輪のすり減りによって変動が生じると予想される。

重量の数値は、平成20年(2008)7月17日の山鉾巡行で実施した計測による数値で、「総重量」は囃子方や作事方、粽や青竹などの搭載物全てを含んだもの、装飾品を含んだ山鉾そのものの重量が「装飾重量」である。つまり、「装飾重量」には、懸装品などの装飾品や真松の重量も含まれている。真松の重量は、「高さ」と同様に変動する要因がある。そのため、曳山の構造部材の重量を比較するには、「装飾重量」はあくまで参考値のひとつとして理解すべきで、例えば部材の寸法を比較して割り出す方法なども用い、総合的に判断する必要がある。

なお、この重量測定の結果は、平成21年(2009)『祇園祭山鉾重量測定報告書』にまとめられている。

	山鉾名	幅 (mm)	高さ (mm)	長さ (mm)	最小回転半径 (mm)	総重量 (kg)	装飾重量 (kg)
曳山	岩戸山	3,900	14,045	6,350	5,850	8,250	5,310
	南観音山	4,450	17,240	6,550	5,900	9,540	6,990
	北観音山	3,950	17,000	6,360	6,100	9,270	6,950
鉾	長刀鉾	4,350	21,760	6,420	6,150	11,100	7,480
	函谷鉾	3,950	24,170	7,000	6,350	11,390	8,330
	菊水鉾	3,950	25,000	6,950	6,600	10,310	7,150
	月鉾	4,100	26,770	6,850	6,450	11,880	8,980
	鶏鉾	3,700	23,880	6,620	6,300	9,420	6,930
	放下鉾	3,800	24,600	6,340	6,150	10,320	7,370
	船鉾	3,300	6,600	6,850	4,900	8,410	5,930
	大船鉾	3,250	6,350	7,470	5,290	(未計測)	(未計測)

表 曳山・鉾の公称サイズと重量

2 現存する曳山の構造比較図

京町家再生研究会

構造比較図に先立って

祇園祭の山鉦は、昭和43年（1968）『祇園祭一山鉦実測』に、鉦7基、曳山3基、舁山19基の実測図面がある。その後に復興した傘鉦2基、舁山1基は、昭和62年（1987）の再版に際して掲載されているが、いずれも図面のみであり、詳細な情報は得られない。なお、大船鉦は平成25年（2013）の『凱旋 祇園祭大船鉦復原の歩み』に基本設計図が収録されている。

鉦の組み立て方と構造の詳細調査は、祇園祭山鉦連合会が企画し京町家再生研究会が実施している（平成18年度ふるさと文化再興事業）。しかし、車両部、櫓、舞台、真木、禿柱など構造部材の調査に限られ、舞台から上の四本柱や屋根、そして曳山は調査対象外であった。

失われた鷹山の構造を文献史料や絵画史料から窺い知ることは困難であるが、江戸時代に製作され現存する曳山を調査し分析することで参考となる。そこで今回、曳山3基の構造について、山建ての経過も含めて詳細な調査を実施した。その結果、屋根を支える化粧材の四本柱及び補助柱の受け方、屋根を貫く真木（真松の下部の柱材）と棟木の取り合い、天井回りの梁・桁の仕口と組み立ての手法との関係について、それぞれの曳山に特徴があることがわかった。

本調査で特筆すべきはビデオ撮影の活用である。山建てが済むと接合部分は縄がらみで見えなくなることや、屋根の小屋組など組みあがると外見からは観察が難しいこと、またそれらの接合部の仕口や嵌め方など、1回限りの動作を余すことなく記録化する必要性が求められた。そのため、立命館大学映像学部鈴木岳海教授の研究室と京都市文化財保護課が協力してビデオ撮影を実施し、3つの曳山それぞれ30～60分程度に編集し、それを分析の参考に供した。

その成果報告が本章前節であり、本節ではそれらの特徴を示す構造図を掲載する。なお、作図は京町家再生研究会による。

（京都市文化財保護課 福持 昌之）

凡例

-  棟木
-  ハネ木
-  四本柱
-  補助柱
-  桁行受木
-  妻行受木

本節の祇園祭曳山3基比較図について

岩戸山、南観音山、北観音山の妻行及び桁行断面図と、屋根伏図及び櫓見下ろし平面図を比較するため、主要部材を色分けした模式図を作成して順に並べた。屋根から四本柱を通して、舞台、櫓下、車両部への力の流れを容易に理解することを目的としたのである。前節に掲載した3基それぞれの説明とその考察を読む際に、断面図や平面図でのそれぞれの相違と類似の関係や、部材相互関係を確認するために役立てていただきたい。なお、この図は主に櫓構造と舞台上の屋根を支える構造の接合部を把握しやすく整理するため、細かな部材を省いて表現していることを予めお断りしておく。

（京町家再生研究会 三木 佑美）

① 岩戸山

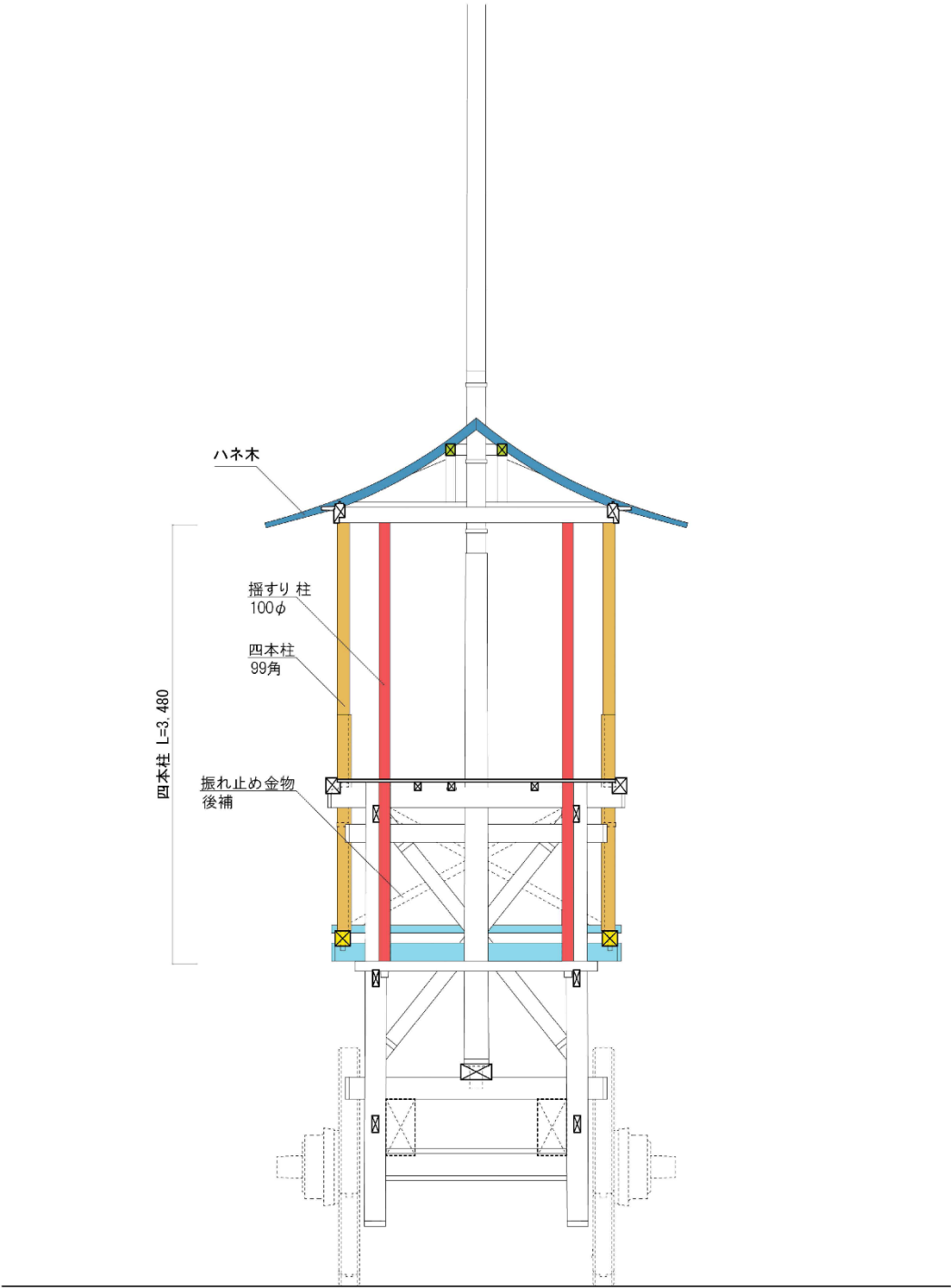


図 1-1 岩戸山妻行断面図

0 500 1000 2000mm
特記無き数字は単位をmmとする

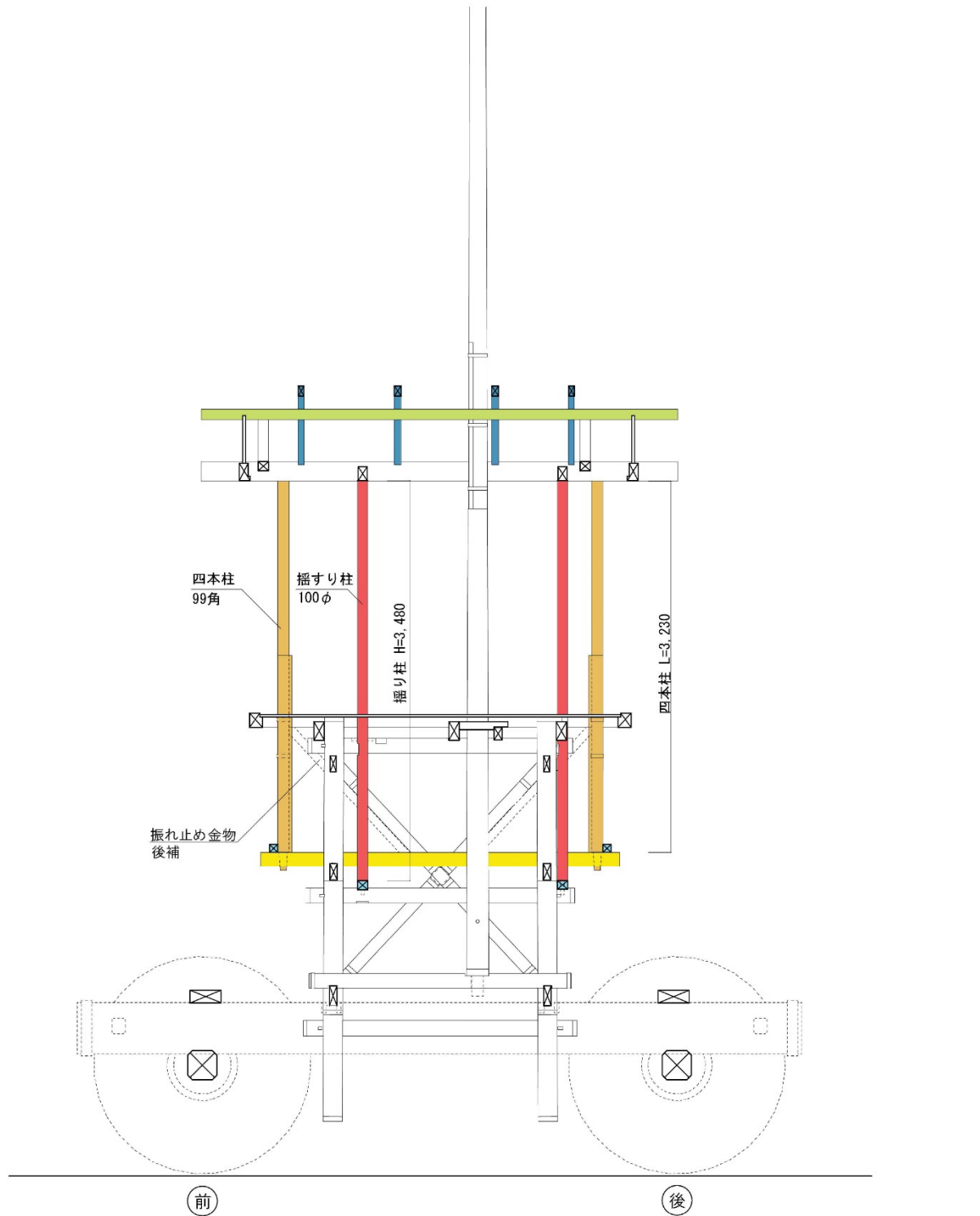
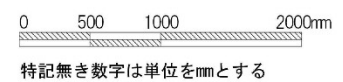


図 1-2 岩戸山桁行断面図



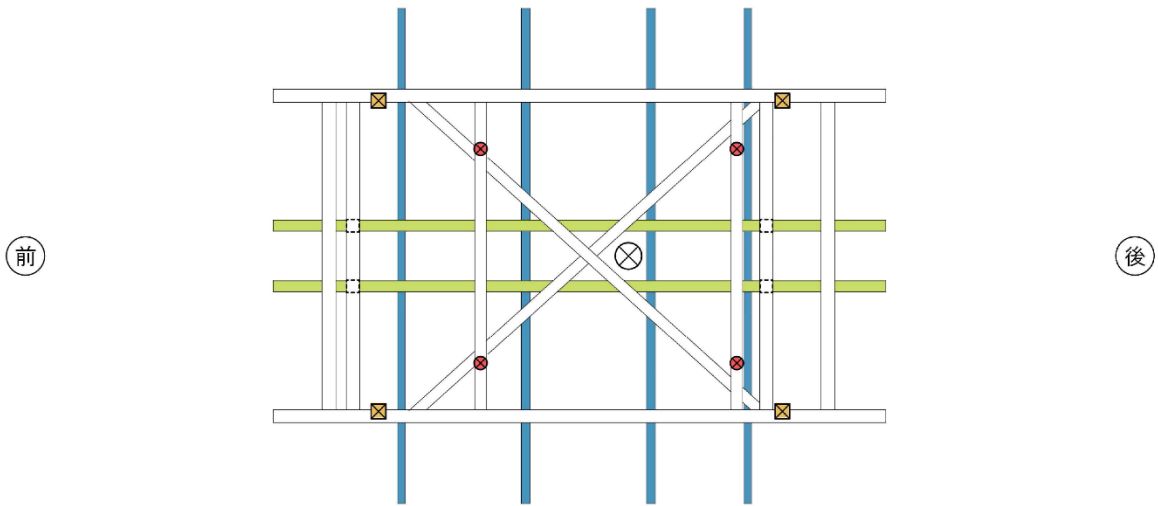


図 1-3 岩戸山伏図

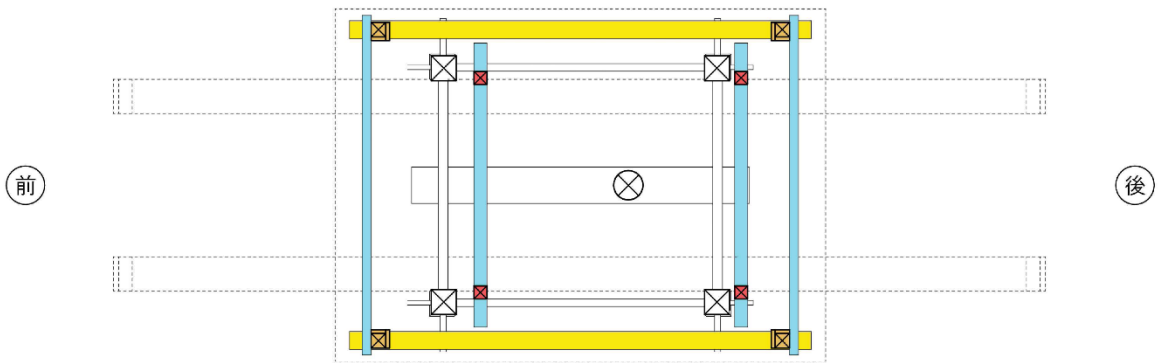


図 1-4 岩戸山伏図

0 500 1000 2000mm
特記無き数字は単位をmmとする

② 南観音山

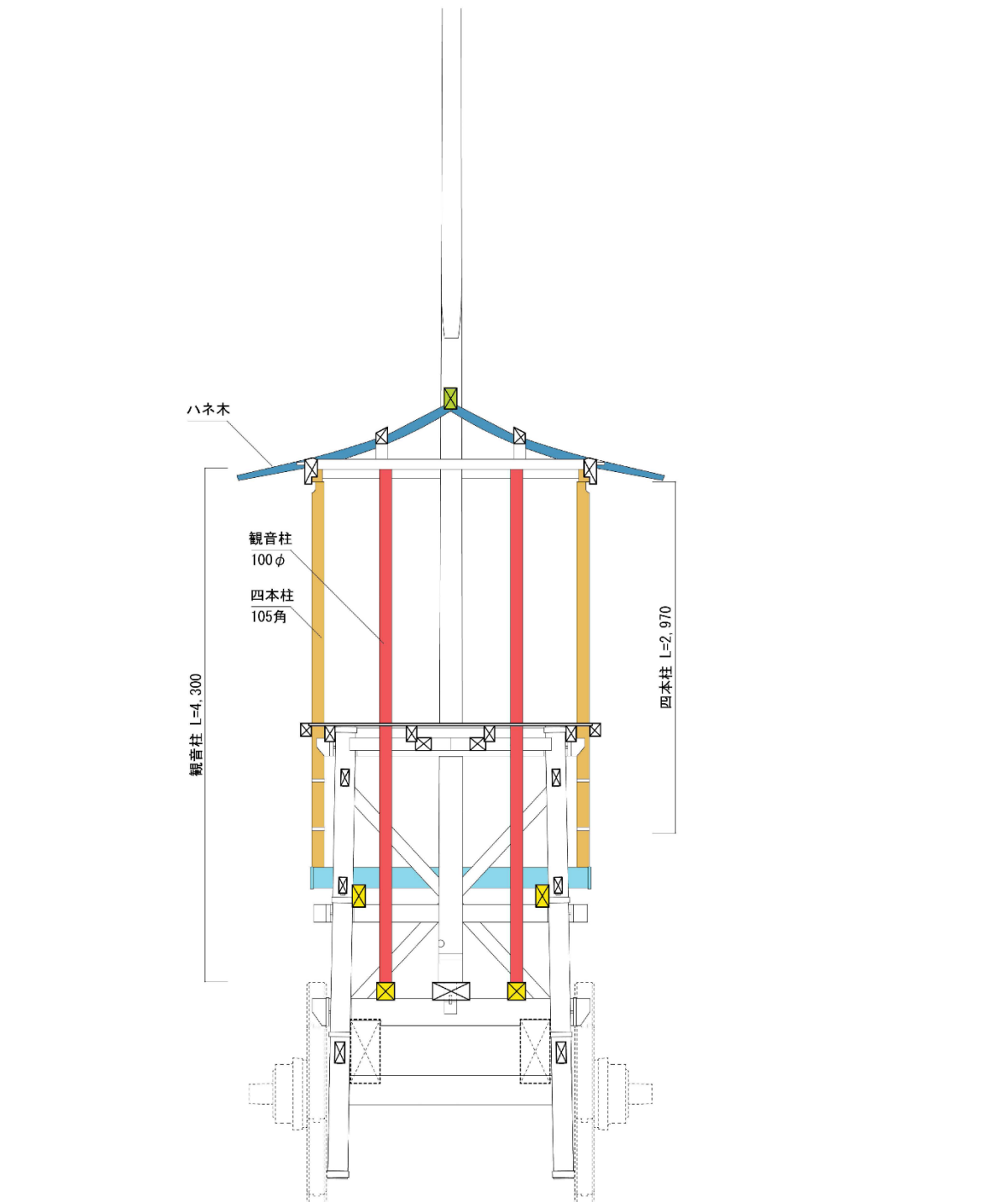


図 2-1 南観音山妻行断面図

0 500 1000 2000mm
特記無き数字は単位をmmとする

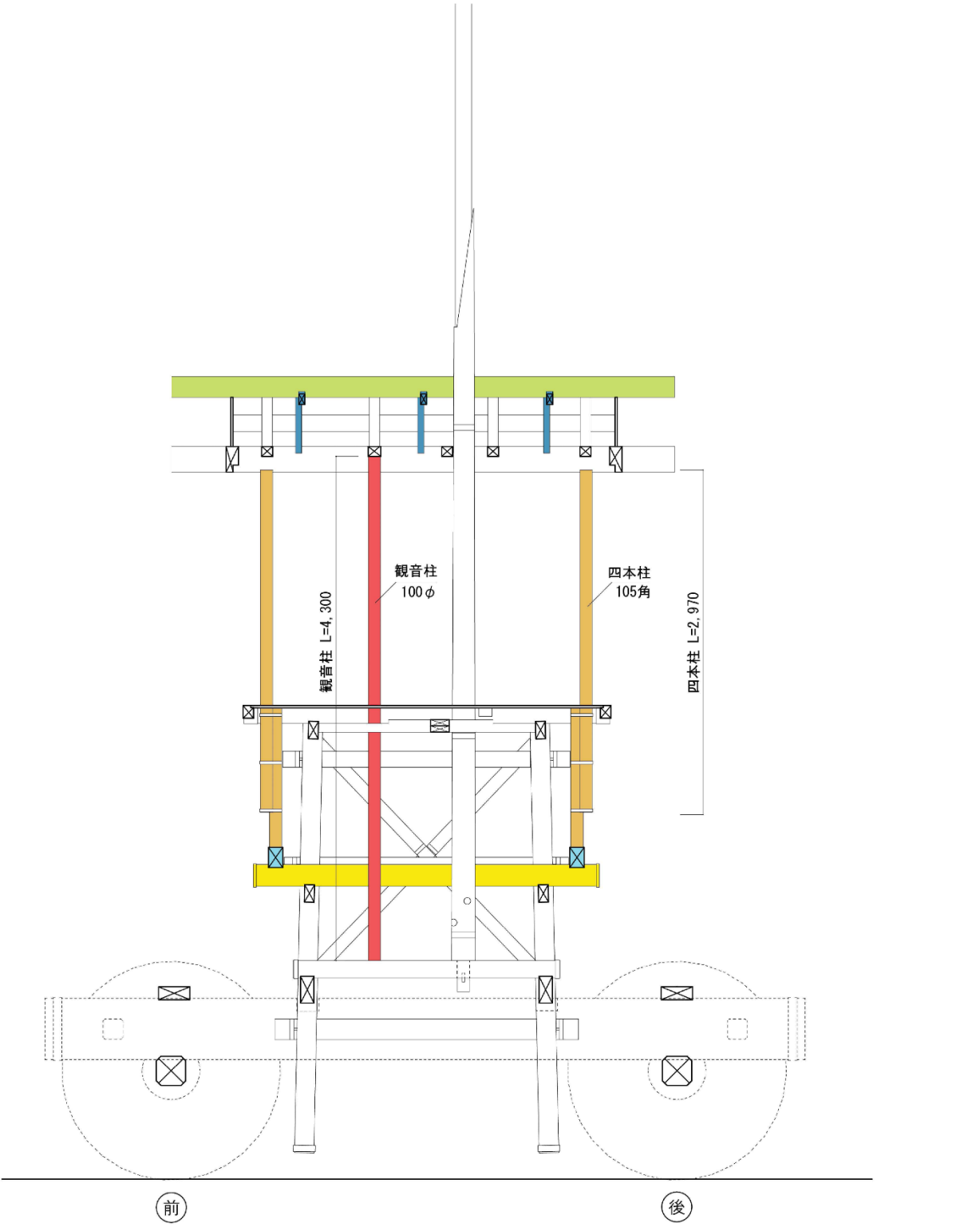


図 2-2 南観音山桁行断面図

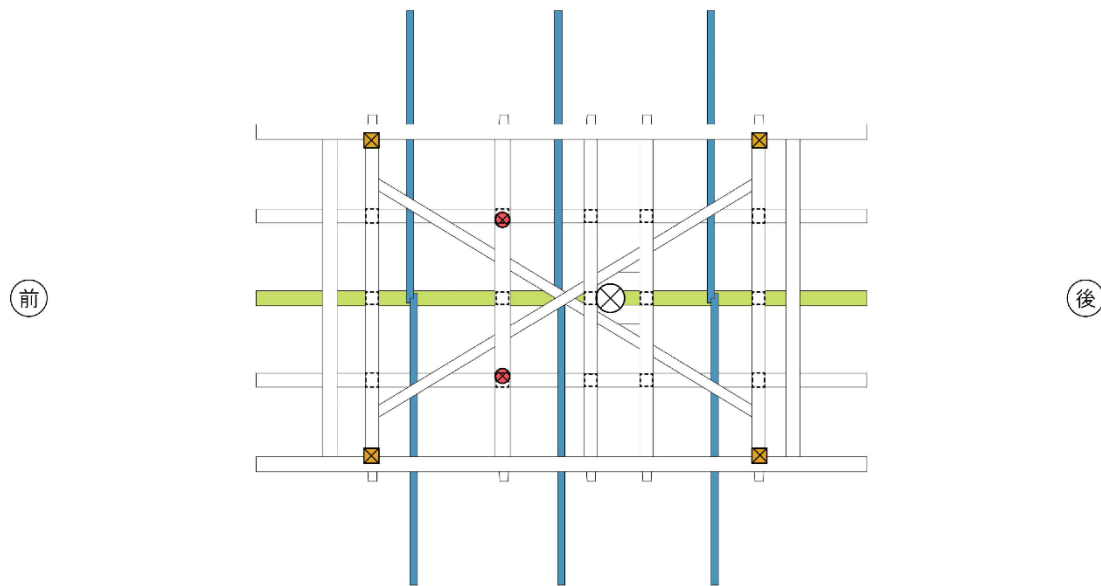


図 2-3 南観音山伏図

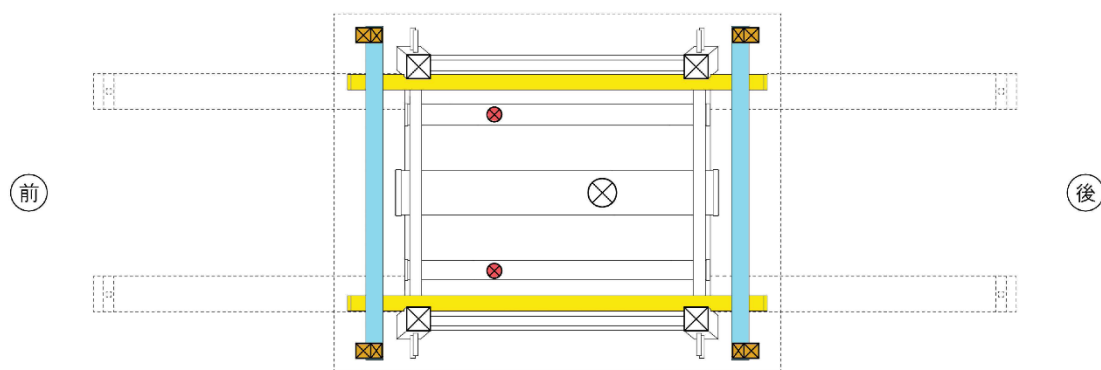


図 2-4 南観音山伏図

0 500 1000 2000mm
特記無き数字は単位をmmとする

③ 北観音山

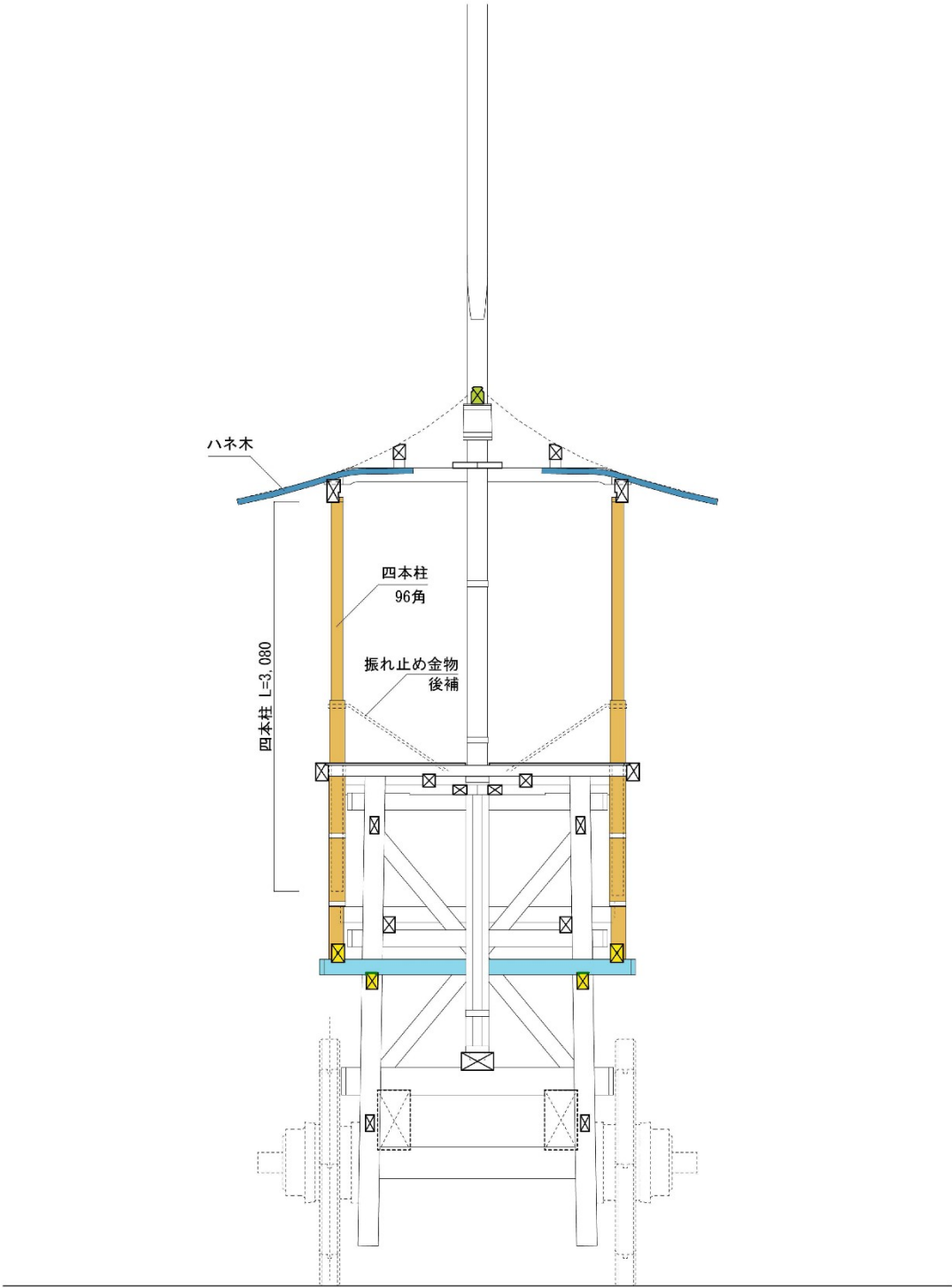
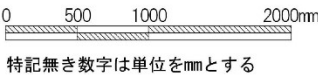


図 3-1 北観音山妻行断面図



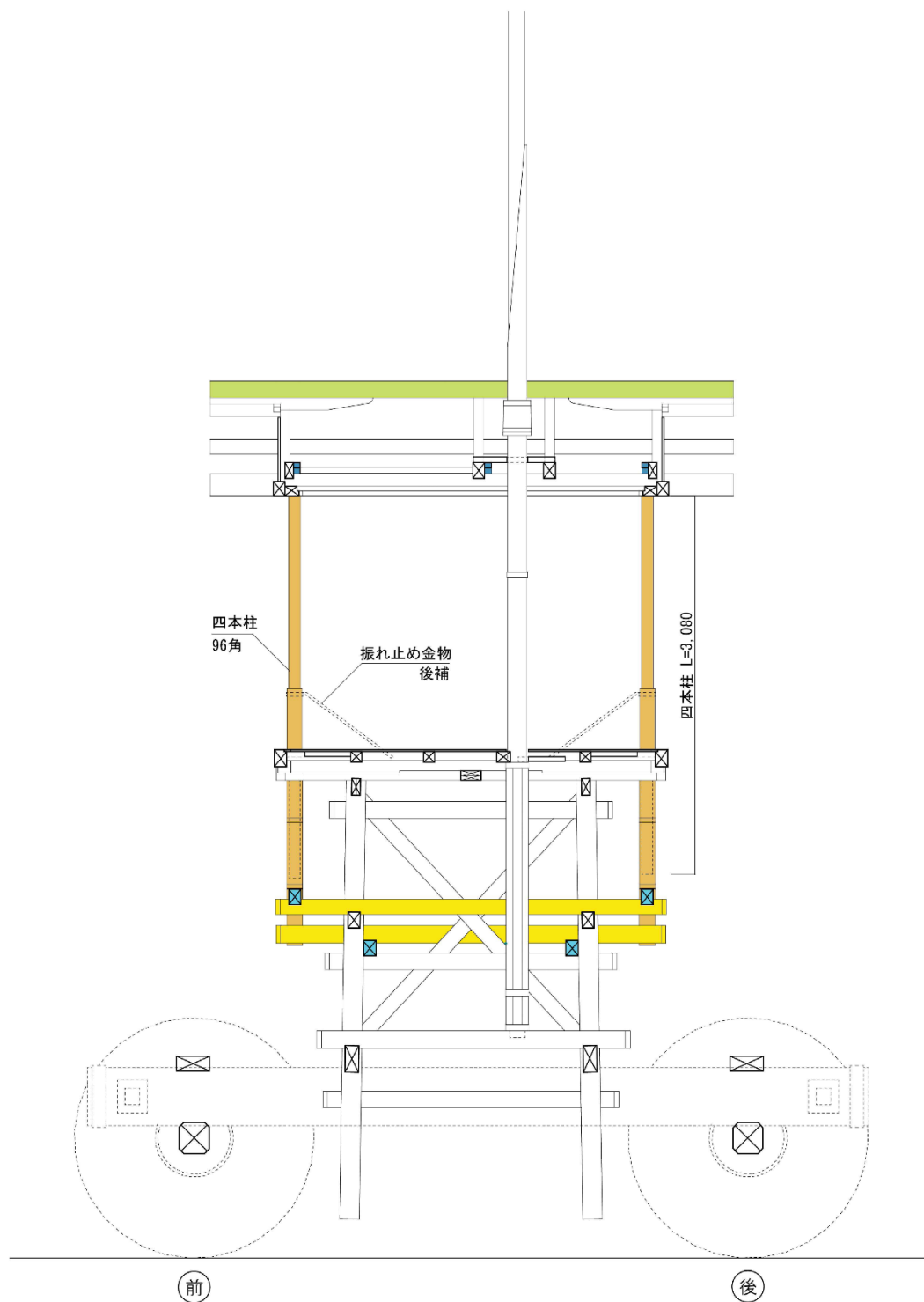
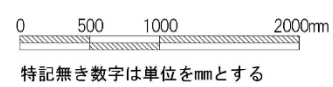


図 3-2 北観音山桁行断面図



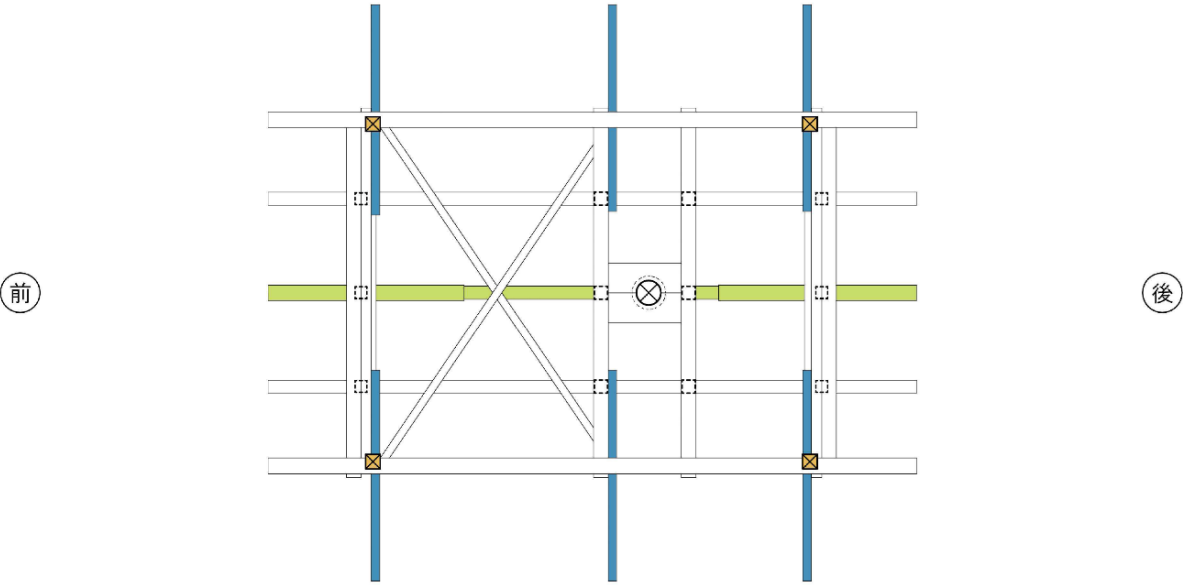


図 3-3 北観音山伏図

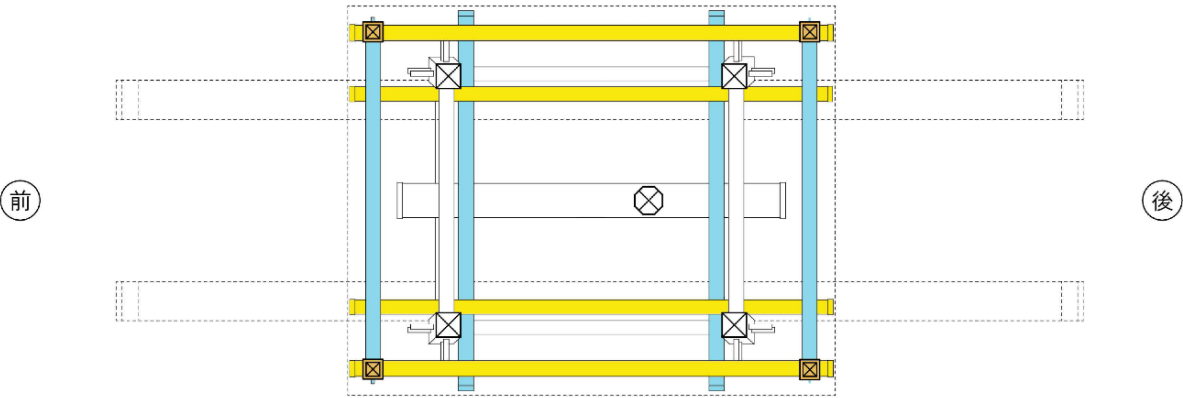


図 3-4 北観音山伏図

0 500 1000 2000mm
特記無き数字は単位をmmとする

参考 山鉾の構造

村上 忠喜

調査結果が示すように、鷹山は曳山の中で最も早くに鉾化の道を歩んだ。その試みに触発されてかどうかはわからないが、天明の大火後の復興時に、他の3基の曳山も大屋根をあげる。その際に最も大きな問題となったのは、曳山の形状で重量のある屋根をどのようにかけ、安全な巡行を実現するのかということであったろう。その方法は、それぞれの山によって異なるが、いずれも手伝方や大工方の苦心の跡がしのばれると同時に、今後の鷹山の設計の参考となるものである。ここには3者の特徴を図化している。

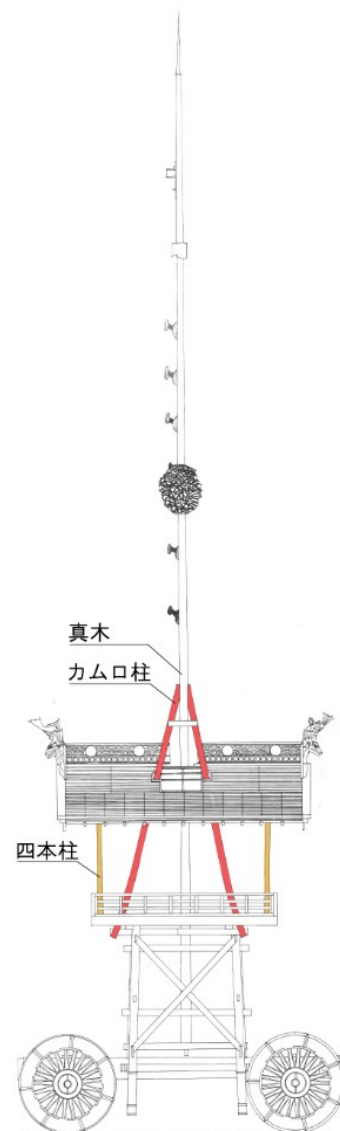
岩戸山：補助柱4本使用。四本柱とあわせて8本の柱で大屋根を支える。櫓のほぼ中央の高さで、山の横方向に渡された受木で補助柱を受ける。

南観音山：補助柱2本使用。四本柱とあわせて6本の柱で大屋根を支える。櫓底部、真松と同じレベルの位置で、山の進行方向に渡された受木で補助柱を受ける。

北観音山：補助柱はない。四本柱のみで大屋根を支える。櫓のほぼ中央部のレベルで、桁行・妻行の2方向の受木が、舞台下にとりついた四本柱を挿し込む袋状部材を受ける。四本柱はその袋状の部材（名称無し）に差し込まれるだけである。いわば四本の刀の鞘のような部材に四本柱がすっぽり挿しこまれるだけで、強度とともに柔軟性のある構造を実現している。

参考までに鉾の構造の特徴を記しておく。鉾のシンボルである長大な真木は、どのように安定させているのか。

曳山同様に、構造の中心は立方体（キューブ）に近い形状の櫓である。実際には上部がすばまった（ころんだ）形状で、キューブよりもさらに安定的な形状である。真木は櫓に深く挿入され、櫓の底部の真木受けでしっかり受けられる。さらに真木は芯持ち材である禿柱（カムロバシラ）によって、ちょうど網隠しの上部の位置で四方から柔らかに支えられる。禿柱は、櫓の上部の面、舞台の下部に通る筋交いの役目を果たすヒウチの両端部分にほぞ穴でしっかりと固定される。真木は禿柱の助けを得て、櫓にしっかりととりつく構造を実現している。これが基本的な構造であり、美しい大屋根は、四本柱の上に立つとはいうものの、その安全性は、屋根を貫く真木と禿柱によって担保されているわけである。



長刀鉾構造図

京都市文化観光局文化課編・発行
『祇園祭—山鉾実測』（京都市文化観光局
文化課 1968）をもとに作成

3 鷹山模型

山下 絵美

(京都市文化財保護課)

鷹山がいかなる姿であったかを知るための参考資料として、個人が所蔵する、鷹山模型(図1)の調査を行った。

模型はたいへん華やかなもので、祇園祭の期間中には恒例で陳列窓に飾られ、寺町通を行きかう人々の目を愉しませている。平成27年(2015)7月2日、まずは模型を現地にて実見し、写真撮影を行った。続いて同月29日、模型を京都市歴史資料館に借り入れ、同年9月25日、京都市文化財保護課が部材調査・撮影を実施した。

木組みは、大屋根の付いた曳山1基(高さ130.0×幅52×奥行73.0cm)と、舁山1基(高さ85.0×幅53.0×奥行67.0cm)の合計2基が伝存するが、これに対して御神体人形は、鷹山の3体(鷹遣・犬遣・樽負)(図3)だけでなく、鈴鹿山の1体(瀬織津姫)、占出山の1体(神功皇后)の3基分があり、懸装品も同様に3基分伝存する。これについては、2基の木組みの胴まわりの寸法が同じであることから、懸装品が付け替えできるように工夫されていることがわかった。また、舁山には車輪がつけられるようになっており、本品が単なる観賞用の模型ではなく、座敷遊びのための、子供が曳いて遊ぶ玩具として製作されたことを示している。

玩具として製作されてはいるものの、つくり自体は贅をこらしたもので、懸装品には多彩な裂が用いられ、四隅や見送幕には房を掛ける。屋根まわりや四本柱、欄縁には金泥や黒漆塗がほどこされ、加えて技巧を凝らした鋳金具がそれぞれに付けられており、実物さながらの豪華な装飾品が揃う(図2)。精巧な細工がほどこされた部材で構成される屋根は、それごと取り外しができるような仕組みで、箱書には「于時明治二十四年七月修復之／塗師 伊藤半七／金物師 村田耕閑／箱工 吉兵衛弟／儀三郎」とあり、明治24年(1891)に修復された記録が残る。ここに記された村田耕閑は、鯉山の欄縁金具の製作者でもあり、玩具の修復とはいえ、当代の金物師に発注していることが知れる。

懸装品のなかで注目されるのが天水引(図4)である。裏地に文化10年(1813)、箱裏に文化7年(1810)の墨書があることから、鷹山が休み山となる文政10年(1827)より以前、巡行していた時代に作成されたものであることがわかる。図様は緋羅紗地に雲間に舞う鳳凰と飛龍、そして金糸の刺繍で隅切り角に釘抜き紋を鳳凰の面の4隅につけており、『増補祇園御霊会細記 参』(文化11年<1814>)[文献16]などの史料にしばしば記される「猩々緋雲鳳王縫」と図様がおおよそ符合する。

御神体人形や懸装品意匠に関する文献史料と照らし合わせてみると、当時の鷹山を実際に飾っていたであろう意匠とは必ずしも一致することはないが、木組み2基を含めた約80点の部材の製作および修理段階において、山の装飾にいかに高い意識が払われていたかを窺える史料である。



図1 全景



図2 屋根まわり



図3 御神体人形（左から鷹遣・犬遣・樽負）



図4 天水引（部分）

4 大津祭・西王母山見送幕

山下 絵美

(京都市文化財保護課)

滋賀県大津市で、毎年9月から10月にかけて催される大津祭の曳山行事（国指定重要無形民俗文化財）の、13基出される曳山のうちの1基、西王母山^{せいおうぼざん}には、鷹山から譲られたとの記録が残る見送幕が伝来することから、平成28年（2016）10月5日、西王母山桃山保存会・高谷尊士会長はじめ関係者立ち会いのもと、調査を実施した。

委員会からは岸本吉博副委員長、藤井健三委員、鷹山からは山田純司理事長、西村吉右衛門副理事長、森村高明理事、行政からは大津市教育委員会、京都府文化財保護課、京都市文化財保護課が参加し、保存会会所にて見送幕の実見、採寸、付属品、保存状態等の調査を行った。

西王母山は、大津市丸屋町を本拠とする曳山で、明暦2年（1656）の創建とされる。西王母の説話を基礎とし、舞台上に西王母・東方朔の人形が載る。所望での、桃が2つに割れて中から童子が現れるからくりで知られる。見送幕については、大津市教育委員会が平成27年（2015）3月に発行した『大津曳山祭総合調査報告書』に詳細が報告されている。

「番鳳凰額百子嬉遊図綴織」（図1）と称される見送は、緋羅紗部分を含めて縦243×横175.5cm、綴織部分で縦202.2×横161.1cmを測る（図2）。上部に鳳凰円紋の額、下方に多数の唐子が戯れる図様である。清時代初期、つまり17世紀の製作とされ、これまで2度の補修が加えられ、一部裁断した痕跡も見られることから、もとの画面は現在より大きく、加工段階で調整が行われたことが推測される。

本作には寛政4年（1792）の箱書きが添い、また丸屋町自治会の所蔵する西王母山関係文書のうち「巡天府織百兒綴錦代銀調達并銀子割戻帳」（寛政4年）には、「寛政四年壬子七月廿六日代銀渡□（ス）／一、銀拾壱貫目／巡天府百兒綴錦見送り代銀／京都鷹山町ヨリ求ル并譲□／（後略）」との記述が見られる。これを手がかりとして、鷹山関連の文書が多く残る「三条衣棚町文書」・「千吉西村家文書」（ともに京都府立京都学・歴彩館蔵）を中心に史料調査を行ったが、これに関連する有力な文書は見いだすことができなかった。祇園祭の懸装品が近郊の祭礼で転用される事例としても留意すべきであり、今後の調査・研究が待たれるところである。

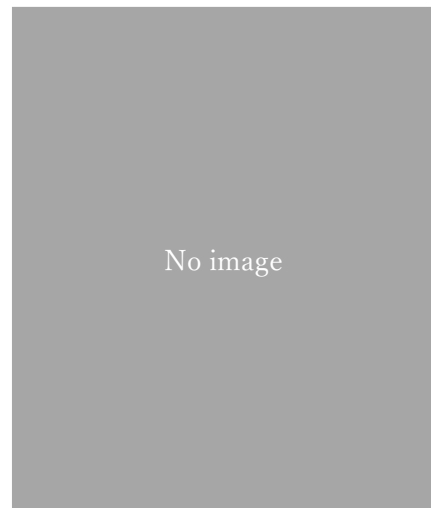


図1 番鳳凰額百子嬉遊図綴織
(西王母山桃山保存会提供)

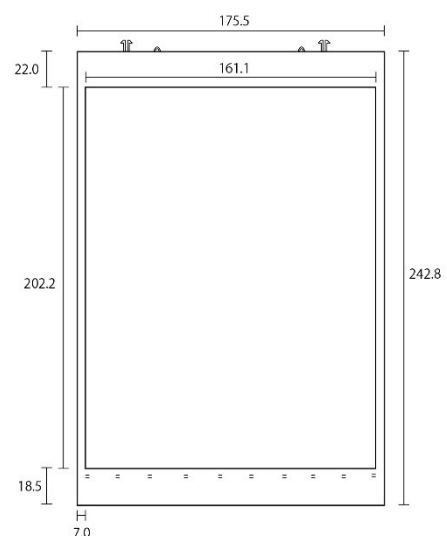


図2 各所法量